

201427006A

厚生労働科学研究費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

献血推進のための効果的な 広報戦略等の開発に関する研究

平成26年度 研究報告書

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター
HIV/AIDS 先端医療開発センター長

白阪 琢磨

厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

平成 26 年度 研究報告書

国立病院機構大阪医療センター
HIV/AIDS先端医療開発センター長

白阪 琢磨

目 次

■ 総括研究報告

- 1 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究…………… 7
 研究代表者：白阪 琢磨（国立大阪医療センター HIV/AIDS先端医療開発センター）

■ 分担研究報告

- 2 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究…………… 25
 研究分担者：西田 一雄（日本赤十字社 血液事業本部）
- 3 献血推進の為の効果的な広報戦略等の開発に関する研究…………… 29
 研究分担者：田辺 善仁（株式会社エフエム大阪 代表取締役社長）
- 4 輸血液の需要に関する研究
 長崎大学医学部保健学科における献血・輸血についての意識調査…………… 33
 研究分担者：秋田 定伯（長崎大学病院 形成外科）
- 5 献血推進に向けた研修方法に関する研究…………… 39
 研究分担者：瀧川 正弘（日本赤十字社 血液事業本部）
- 6 献血率に与える要因分析と効果的な施策のあり方に関する研究…………… 43
 研究分担者：河原 和夫（東京医科歯科大学大学院 政策科学分野）
- 7 献血推進施策の効果に関する研究 …………… 91
 献血本数の推移と献血推進運動との関連性
 研究分担者：田中 純子（広島大学 大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学）

総括研究報告

1

献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

研究代表者：白阪 琢磨（国立大阪医療センター HIV/AIDS 先端医療開発センター）

研究分担者：秋田 定伯（長崎大学病院 形成外科）

輸血液の需要に関する研究

—長崎大学医学部保健学科における献血・輸血についての意識調査—

西田 一雄（日本赤十字社 血液事業本部）

供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究

瀧川 正弘（日本赤十字社 血液事業本部）

献血推進に向けた研修方法に関する研究

田辺 善仁（株式会社エフエム大阪）

献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究

河原 和夫（東京医科歯科大学 大学院政策科学分野）

献血率に与える要因分析と効果的な施策のあり方に関する研究

田中 純子（広島大学 大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学）

献血推進施策の効果に関する研究

—献血本数の推移と献血推進運動との関連

研究協力者：大平 勝美（社会福祉法人 はばたき福祉事業団）

柿沼 章子（社会福祉法人 はばたき福祉事業団）

研究要旨

本研究班では3年間で次の3テーマに付き研究を実施した。1. 輸血液の需要と供給の推計研究 輸血液の需要について、我が国は、今後、高齢化による疾病構造の変化や臓器移植の推進など、治療における輸血液の需要は、ますます高まると予測される一方で、若者を中心とした献血離れの傾向が指摘されており、需要に見合った献血が確保されるかの検討は十分にされていない。本研究では、これまでの献血の実績に基づいた将来の献血者数・量の予測を行い、人口動態や疾患構造を踏まえ、必要な血液製剤の量、献血者数の将来予測を行った。2. 献血推進施策評価研究 前述のように輸血液の需要の増加にも拘わらず、供血者の減少、特に若年者層での献血離れの傾向が近年指摘され、献血推進が重大な課題となっている。そのためにも献血推進については日本赤十字社を中心に、JFN（ジャパンエフエムネットワーク）など様々な関係者が多岐にわたる施策に取り組んでいるが、その効果は十分に検証されていない。先行研究では献血室に訪れた献血者や、大学祭などに参加する若者、さらに輸血を受けた患者へのアンケート調査によって部分的には明らかにでき、自治体別、月別、年代別、性別の献血数の詳細なデータ分析から献血推進施策との関連をある程度は類推が可能であったが、詳細な分析には至っていない。本研究では、多岐にわたる献血推進施策から主なものを抽出し、アンケート調査あるいは献血数（量）の推移との関連を調査し、施策の効果の検証を行った。3. 献血推進に影響を与える因子に関する研究 先行研究で献血の動機に博愛精神があった。献血者にとって自分の献血がどう役立っているかを知ることは献血推進に繋がると予想され、輸血者による献血の評価の実態を調査した。さらに献血推進に繋がると予測される次の因子についても検討した。即ち、若者の献血意識、血液センターで献血に従事する職員の接遇向上、全国の学生献血推進ボランティアの活性化、献血経験者、未経験者の意識、行動の解析、献血者の居住地と献血場所の関係、自治体別・年齢階級別の標準化献血比の算定などである。本年度は最終年度であり、これらを検討し献血推進に繋げる方策を示した。

研究目的

本研究では 1) 献血者数および献血本数に関する将来推計および献血者の必要数(量)の将来予測、2) 主な献血推進施策の献血推進効果の評価、3) 献血推進に影響を与えると考えられる主要な要素に付き検討を行う。最終年度に結果を総合的に解析する。

研究方法および結果

本研究では、大きく 3 つの研究を実施した。1) 献血者数および献血本数に関する将来推計および献血者の必要数(量)の将来予測、2) 主な献血推進施策の献血推進効果の評価、3) 献血推進に影響を与えると考えられる主要な要素に付き検討を行った。具体的には、次の 6 つの研究分担を実施した。研究分担 1 輸血液の需要に関する研究-長崎大学医学部保健学科における献血・輸血についての意識調査-(秋田定伯)、研究分担 2 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究(西田一雄)、研究分担 3 献血推進に向けた研修方法に関する研究(瀧川正弘)、研究分担 4 献血推進の為に効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究(田辺善仁)、研究分担 5 献血率に与える要因分析と効果的な施策のあり方に関する研究(河原和夫)、研究分担 6 献血推進施策の効果に関する研究-献血本数の推移と献血推進運動との関連性-(田中純子)の 6 研究である。本年度の研究に付き各研究分担毎にまとめる。

研究分担1 献血・輸血に対して意識が高いと思われる医療職を目指す長崎大学医学部保健学科(看護科、理学療法科、作業療法科)を対象に意識調査を実施し、献血する側の若い世代に、アンケート調査を実施し、回答することで献血・輸血の重要性を意識づけ、献血推進の広報活動となる行動変容を期待し、被験者の属性、自由記載とともに、献血に対する認識の調査を実施した。これまでの調査で献血を忌避する理由の一つとして挙げられた献血時採血時の疼痛のフェイススケール、輸血を想定した際の 4 段階選択調査を実施し、これまでの当研究班でのデータを踏まえて検討した。さらに、過去 2 年間の結果を踏まえ、献血の際の痛みが献血を忌避する理由としてあげられていたことからフェイススケールを用いて 0~5 までの 6 段階で許容範囲を検討した。「献血を敬遠するか」の質問に対して、「敬遠する」もの

が全体で 61.5%であったが、献血経験者では 75.7%がそのように思わないとの回答であった。献血未経験者が献血を敬遠する理由は、何となく不安・針を刺すのが痛く嫌・恐怖心・血液を採られるのが嫌などの心理的、身体的な危害をあげる者が、54.6%で最も多く、次いで時間がかかる・時間がない(23.4%)、健康上できない(10.9%)である。一方、献血経験者では、時間がかかる・時間がない(48.5%)、何となく不安・針を刺すのが痛く嫌・恐怖心・血液を採られるのが嫌が続く(33.3%)、献血場所が分からない・入りづらいたとした者も 9.1%いた。献血状況についての質問には、若年層の献血減少を知っている者が 55%であり、他人に献血を勧める者が 14.3%となっている。また、献血推進へは 36.6%が協力的すると回答し、献血キャンペーンのマスコットである「けんけつちゃん」の認知度も 77.7%に及んでいた。

研究分担 2 医学の進歩によって臓器移植が可能になるなど、治療における輸血用血液製剤の需要は高まり、特に、改正臓器移植法の施行に伴い緊急かつ大量輸血の事例が増加している。今後安全な血液を如何に安定的に確保するかが重要な課題である。厚生労働省が実施した若年層意識調査の結果及び検証を踏まえて検討された「献血推進のあり方に関する検討会」報告においても輸血用血液製剤の需要の増加にも拘わらず、若年層の献血離れの傾向に歯止めがかからないことが指摘されている。その理由が明らかにされていないことから、平成 21 年度から本研究において献血推進における広報の効果に関する研究を実施してきた。今後は、安全な輸血用血液製剤の安定的な確保のために、これまでの研究を踏まえ、献血の実情を明らかにし、その原因の解明を行い、さらなる対策を提示することが重要と考えた。

研究分担3 より安全な輸血用血液製剤を安定的に供給するためには、日常からより有効となる献血推進を展開する必要がある。近年は、特に若年層献血者が減少傾向にあり、献血離れの現象があることが指摘されており、同研究事業では「供血者の実情調査と献血促進及び阻害因子に関する研究」において、その原因の解明を行い、献血推進に向けた戦略的な広報の開発研究に取り組んでいる。一方で、広報展開も含めたより有効な献血推進を継続的に実施し、目標を達成するためには、職員や学生献血推進

ボランティア等のスキル向上が不可欠であり、理想的な研修モデルを構築することが重要であることから、本年度において学生ボランティアの研修を重点項目とした。

研究分担4 今後の若者献血行動の促進を行うために、献血に対する意識調査を実施。アンケートは若者が多く集まり、命の大切さを理解するというソーシャルライブ飲酒運転撲滅の為の「SDDライブ2014」にて実施し、本年の「SDDライブ2015」でも実施する。また、日本赤十字社とJFNグループで全国展開するLOVE in ACTIONのリスナーお便りやFM 大阪の独自の献血広報レギュラー番組と御堂筋献血ルームでの毎週土曜に開催されるミニライブにより、献血広報の効果的な在り方の検証を行った。

研究分担5 急速な少子高齢化により、血液製剤の需給バランスの不均衡が生じることが危惧されている。必要な献血者を確保するためには、献血推進活動などを通じて献血未経験者を新たな献血者に移行させることや既献血者が複数回献血するなどの献血基盤の強化が求められている。本研究は、全国市区町村や地域血液センターの“献血推進担当者”に対して献血推進に関する意識調査を行い、地域での献血推進に資する方策の選択がなされているか否か、妥当な献血推進施策が実施されているかを検証し、加えて、今後の献血推進活動の方向性を提示するために実施した。市区町村の担当者の多くは、献血バスの利用など移動採血の形態が献血機会の確保に有効であるとの認識を持っていた。献血が「うまくいく」あるいは「うまくいかない」理由として共通しているのは、「献血バス」の利用状況であった。献血バスの効率的な運用が、血液事業のカギを握っているという共通認識があると考えた。次に、地域血液センターに対する調査結果では、日赤本社との意思の疎通が「あまりない」や「まったくない」と答えたセンターが合わせて11あった。ブロック制を導入したために、地域センターと本社との関係が疎遠になったのか、あるいは以前からそうであったのか精査する必要がある。また、保健所などの公共施設との意思の疎通の状況も芳しくない。両者とも血液事業の推進のためには重要なカウンター・パートであるという理解が必要である。さらに、市区町村と同じく、献血バスを主軸とする移動採血の評価が高い結

果が出た。今後、効果的な運用を地域ごとに考えていく必要がある。所管する都道府県の献血状況が悪いと回答したところは、「20歳代の献血者が少ないため」と「学生の献血者が少ないため」、「住民に献血思想が行き渡っていないため」、「献血ルームや血液センターなどの固定施設の利用者が少ないため」、「10歳代の献血者が少ないため」、「献血バスの利用者が少ないため」というのが上位であり、市区町村の調査の回答と同様であった。市区町村を交えて抜本的な解決策となる献血方法の開発が必要である。「SNS等のツールによる呼びかけ」、「ホームページでの情報提供」、「メールマガジンの発信」、「献血ルームなどでの付加サービス（例、占いやネイルサービスなど）」に対しては、肯定的な評価がほとんどであったが、今後の発展が注目される場所である。「今後の献血推進のために特に大切だと思われること」については、「固定施設（献血ルームや血液センター）の場所、数、時間の工夫」と「移動施設（献血バス）の訪問先、回数、時間、数の工夫」が重要と考える意見が多くみられた。これらが今後の血液事業を発展させるカギとなる項目と考えられる。今回の調査では、献血について市区町村および血液センター両者から意見を聞くことができた。両者には共通する認識もあれば、相違する点もある。献血を推進していくために、市区町村と地域血液センターが十分に話し合っ、地域事情に応じた血液事業政策の確立が求められている。

研究分担6 平成18年4月1日から平成26年3月31日までの全献血についての資料を基に、1) Love in Actionイベントの実施月と月別献血本数の推移との関連性、2) 献血本数の将来予測と実測値の比較につき、解析、検討を実施した。1) Love in Actionイベントの実施月と月別献血本数の推移との関連性については、都道府県別に月別献血本数のグラフを並べて検討したが、明らかな関連性はみられなかった。しかし、Love in Actionの行われた月と献血本数との関連性を、年度と月を調整して、多変量解析を行ったところ、「Love in Actionの実施」は実施しなかった場合よりも有意に「献血本数」が0.8%増加することが明らかとなった。2) 平成24-25年度に示した献血本数の将来予測による予測値と実測値との比較では、平成20-21(2008-09)年度の「献血増加

行動に基づく将来予測値よりも、実際は減少し、平成18-19(2006-07)年度の「献血減少」行動に基づく将来予測値よりも、実際は増加した。これは、平成18年度以降献血行動が活動的になったが、平成23年以降には下がったと、考えられた。この要因を検討するために、平成20-25年度の年間献血本数を出生年別に算出し、推移比較すると、若年層(1980年代以降出生)は19歳をピークに、1960年代生まれは2012年以降、1950年代生まれは2009-10年以降献血が減少していることが明らかになった。以上のことから、献血推進施策立案において次の3点を考慮すべきと考えられた。1. 平成19年以降の全体の献血本数増加に寄与していたと考えられる中高年層の献血本数は22-24年頃から減少に転じていた。しかしながら、今後50歳代・60歳代になる中高年層への献血推進は、健康面や献血基準の面から困難であると考えられた。2. 若年層では献血本数が低下し始める20歳代前半の献血推進が将来の献血本数確保の面から有効であると考えられた。3. Love in Actionプロジェクトのイベント実施により、イベントを行っていない場合よりも、献血本数が有意に増加(0.8%)すると推定された。イベント中またはイベント後に献血をした人に継続して献血してもらうための対策が有効であると考えられた。

結論

本研究では 1) 献血者数および献血本数に関する将来推計および献血者の必要数(量)の将来予測、2) 主な献血推進施策の献血推進効果の評価、3) 献血推進に影響を与えると考えられる主要な要素に付き検討を行い、最終年度に総合的に解析を行った。本年度は3年の3年目として当初の研究目標をほぼ達成できたと考えられる。

業績

白阪琢磨

(1) 論文発表

1. Katano H, Hishima T, Mochizuki M, Kodama Y, Oyaizu N, Ota Y, Mine S, Igari T, Ajisawa A, Teruya K, Tanuma J, Kikuchi Y, Uehira T, Shirasaka T, Koibuchi T, Iwamoto A, Oka S, Hasegawa H, Okada S, Yasuoka A. The prevalence

of opportunistic infections and malignancies in autopsied patients with human immunodeficiency virus infection in Japan. *BMC Infect Dis.* 14:229. Published online 2014

2. Yajima K, Uehira T, Otera H, Koizumi Y, Watanabe D, Kodama Y, Kuzushita N, Nishida Y, Mita E, Mano M, Shirasaka T: A case of non-cirrhotic portal hypertension associated with anti-retroviral therapy in a Japanese patient with human immunodeficiency virus infection. *J Infect Chemother.* 20(9):582-5, 2014

3. Ogawa Y, Watanabe D, Hirota K, Ikuma M, Yajima K, Kasai D, Mori K, Ota Y, Nishida Y, Uehira T, Mano M, Yamane T, Shirasaka T. Rapid multiorgan failure due to large B-cell lymphoma arising in human herpesvirus-8-associated multicentric Castleman disease in a human immunodeficiency virus-infected patient. *Intern Med.* 253(24):2805-9, 2014

4. 白阪琢磨:抗HIV用薬。治療薬ハンドブック2015、株式会社じほう、2015

5. 白阪琢磨:座談会「新しい治療ガイドライン—HIV初感染・妊婦の治療、職業的HIV曝露時の感染予防も含めて—」、HIV感染症とAIDSの治療5(1)4-12, 2014

6. 矢嶋敬史郎、白阪琢磨:連載エイズに見られる感染症と悪性腫瘍(9)サルモネラ菌血症。「化学療法の領域」30(7)、2014

7. 白阪琢磨:特集2「新規HIV感染者は過去2位、新規AIDS患者は過去最多。伸び率が高いのは、50代以上です」。健43(9)22-23、2014年

8. 吉岡巖、金宮健翁、木下竜弥、鄭則秀、原田泰規、上平朝子、白阪琢磨、岡聖次:抗HIV薬Atazanavir内服患者に発生した尿路結石症の検討。泌尿器外科27(11):1823-1827、2014

9. 白阪琢磨：第4章治療と管理・対応「抗HIV-1療法：いつ、どのように開始するか」。最新医学別冊「新しい診断と治療のABC 65HIV 感染症とAIDS 改訂第2版」、2014

10. 白阪琢磨：エイズ治療の理解へシンポ。中日新聞12版P.24、2014

11. 白阪琢磨：抗HIV用薬。治療薬ハンドブック2014、株式会社じほう、2014

12. 白阪琢磨：第6回市民公開シンポジウム「エイズ無き時代を目指して～過去から未来へ～」。中日新聞P.9、2014

(2) 発表

1. 白阪琢磨：輸血療法とHIVについて。大阪府第15回輸血療法委員会会議講演、大阪、3月2015年

秋田定伯

1. 論文発表

1. Akita S, Akatsuka M: Surgical debridement. In “Skin Necrosis” (Eds.) Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp 19-24, Springer-Verlag, Heidelberg

2. Murakami C, Fujioka M, Akita S: How to manageradiation injuries. In “Skin Necrosis” (Eds.) TeotL, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp 71-74, Springer-Verlag, Heidelberg

3. Akita S: Infection Context: Necrotizingfasciitis. In “SkinNecrosis” (Eds.) Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp83-87, Springer-Verlag, Heidelberg

4. Hayashida K, Fujioka M, Murakami C, Akita S: Toxic syndromes. In “Skin Necrosis” (Eds.)Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, EnnisWI, pp 105-108, Springer-Verlag, Heidelberg

5. Akita S, Houbara S, Akatsuka M: Imaging,

vascular assessment: Extension in depth andvascular anomalies. In “Skin Necrosis” (Eds.)Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, EnnisWI, pp 257-263, Springer-Verlag, Heidelberg

6. 秋田定伯：ケロイド・肥厚性癬痕の評価・分類－国際比較－、傷あとケロイドはここまで治せる、小川令（編集）、8頁、in press、克誠堂出版、東京

7. 秋田定伯：創傷治癒、TEXT 形成外科学第3版、波利井清紀（監修）、中塚貴志、亀井讓（編集）7頁、in press、南山堂、東京

8. Akita S, Houbara S, Hirano A: Management of vascular malformations. Plastic and Reconstructive Surgery-G02: e128, 2014

9. Tanaka K, Akita S, Yoshimoto H, Houbara S, HiranoA: Lipid-colloid dressing shows improvedreepithelialization, pain relief, and cornealbarrier function in split-thickness skin-graftdonor wound healing. International Journal ofLower Extremity Wounds 13: 220-225, 2014

10. Houbara S, Akita S, Yoshimoto H, Hirano A:Vascular malformations that were diagnosed asor accompanied by malignant tumors. Dermatologic Surgery 40: 1225-1232, 2014

11. 松井裕輔、三村秀文、大須賀慶悟、秋田定伯、渡部茂、力久直昭、田中純子、森井英一、高倉伸幸、佐々木了：血管腫・血管奇形の全国実態調査に向けての予備調査結果の報告。IVR: Interventional Radiology 29: 62-67, 2014

12. Akita S: Treatment of Radiation Injury. Advances in Wound Care 3: 1-11, 2014

(2) 学会発表

1. Akita S, Yoshimoto H, Yamanobe Y, Murakami R: Post-operative management by telemetry/tele-medicinesystem. 6th International Workshop on Wound Technology, Paris, France, January, 2014.
2. Akita S: Limitation of treating malignantwounds. Middle East wounds and scar meeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014
3. Akita S: Face, extremities, skin, soft tissueand bone, tumors, wounds and scars-benign or malignant? -Middle East wounds and scar meeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014
4. Akita S: Guidelines in practice and theory inwound care-Japanese plastic surgeon's 3-yeartrait. Middle East wounds and scar meeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014
5. Akita S, Yoshimoto H, Houbara S, Hirano A: Analysis of efficacy of mesenchymal stem cellin pathologic environment. SAWC/WHS annualmeeting, Orlando, Florida, April, 2014
6. Yoshida S, Yoshimoto H, Akita S, Hirano A: Woundhealing and angiogenesis through combined useof a vascularized tissue flap andadipose-derived stem cells in a rat hindlimbischemia model. SAWC/WHS annual meeting, Orlando, Florida, April, 2014
7. Akita S: Stem cell and radiation. The 12th Korea-JapanCongress of Plastic and Reconstructive Surgery, panel discussion, SongdoConvensia, Incheon, Korea, May, 2014
8. 秋田定伯、吉本浩、千住千佳子、平野明喜、藤岡正樹、林田健志、西條広人、桑原郁: Wound bedpreparation を含めた創傷治療技術開発の基盤的教育プログラムの開発。第 57 回日本形成外科学会、ミニシンポジウム、長崎、4 月、2014 年
9. 秋田定伯、林田健志、吉本浩、木下直志、吉田周平、平野明喜: 【熱傷基礎研究の最前線】急性放射線障害のメカニズムと治療方法の開発。第 40 回日本熱傷学会、パネルディスカッション、埼玉、6 月、2014 年
10. 秋田定伯、吉本浩、吉田周平、林田健志、平野明喜: 【瘢痕の低侵襲治療】瘢痕を最小限度に導く工夫と分子基盤。第 6 回日本創傷外科学会、パネルディスカッション、高松、7 月、2014 年
11. 吉田周平、Rodrigo Hamuy、吉本浩、秋田定伯、平野明喜: リンパ浮腫モデルにおける脂肪由来幹細胞を用いたリンパ管再生療法。第 23 回日本形成外科学会基礎学術集会、シンポジウム、松本市、10 月、2014 年
12. 秋田定伯: 創傷治癒、瘢痕、ケロイド、肥厚性瘢痕。第 57 回日本形成外科学会、プレスカンファレンス、長崎、4 月、2014 年
13. 秋田定伯: ガイドラインの作成と査読を通じて。第 57 回日本形成外科学会、特別企画、長崎、4 月、2014 年
14. Akita S: ressure ulcer pathophysiology in externalforce, strain, compression and undermining. 8thInternational Workshop on Wound Technology, Paris, France, January, 2015.

河原和夫

(1) 原著論文

1. Kogure T, Sumitani M, Suka M, Ishikawa H, Odajima T, Igarashi A, Kusama M, Okamoto M, Sugimori H, Kawahara K: Validity and Reliabilityof the Japanese Version of the Newest VitalSign: A Preliminary Study. PLOS ONE, April 24, 2014.

2. Shimizu E, Kawahara K: Assessment of Medical Information Databases to Estimate Patient Numbers. 薬剤疫学. 第18巻・第2号、2014.
 3. Tareque MI, Islam TM, Kawahara K, Sugawa M, Saito Y: Healthy life expectancy and the correlates of self-rated health in an ageing population in Rajshahi district of Bangladesh. Ageing and Society. online: 25 February 2014.
 4. Tareque MI, Islam TM, Koshio A, Kawahara K: Economic Well-Being and Elder Abuse in Rajshahi District of Bangladesh. SAGE Journal Research on Aging, online March 27, 2014.
 5. Yoshida K, Kawahara K: Impact of a fixed price system on the supply of institutional long-term care: comparative study of Japanese and German metropolitan areas. BMC Health Services Research. 2014, 14(1): 48.
 6. Tareque MI, Hoque N, Islam TM, Kawahara K, Sugawa M: Relationships between the active aging index and disability-free life expectancy: A case study in the Rajshahi district of Bangladesh. Canadian Journal on Aging.
 7. Okamoto S, Kawahara K, Okawa A, Tanaka Y: Values and risks of second opinion in Japan's universal health care system. Health Policy in publication, January 2014.
- (2) 学会発表
1. 河原和夫、菅河真紀子: 献血者の行動特性に応じた献血率向上のための諸施策の検討 (第1報) 第38回日本血液事業学会総会、広島市、2014
 2. 菅河真紀子、河原和夫: 献血者の行動特性に応じた献血率向上のための諸施策の検討 (第2報) 第38回日本血液事業学会総会、広島市
 3. 河原和夫、熊澤大輔、菅河真紀子: 現行の体重に関する献血基準の評価について。第73回日本公衆衛生学会総会、宇都宮市、2014
 4. 菅河真紀子、熊澤大輔、河原和夫: 首都圏における献血者の地理的移動特性に関する研究。第73回日本公衆衛生学会総会、宇都宮市、2014
- 田中純子
- (1) 著書
1. 田中純子、片山恵子: 日本における肝臓の疫学的動向・概論、日本臨牀増刊号最新肝臓学、2015;73(1):51-58.
 2. 田中純子: HCV 感染の疫学・感染経路、HEPATOLOGY PRACTICE, 2014;3:15-22.
 3. 田中純子: HCV 感染の疫学の現況と今後、肝疾患 2014-2015 Review, 2014:27-33.
 4. 田中純子: 疫学的視点からみた肝炎対策-肝炎の地域連携、公費助成制度-、診断と治療、2014;102(11):1681-1688.
- 論文
1. Tanaka J, Katayama K, Matsuo J, Akita T, Asao T, Ohisa M, Tsuchiya S, Yorioka N: The association of hepatitis C virus infection with the prognosis of chronic hemodialysis patients: a retrospective study of 3,064 patients between 1999 and 2010, Journal of Medical Virology, in press.
 2. Ohisa M, Kimura Y, Matsuo J, Akita T, Matsuoka T, Sakamune K, Katayama K, Do H S, Miyakawa Y, Tanaka J: Estimation number of patients with liver disease related to hepatitis B or C virus infection based on the database reconstructed from the medial claim from 2008 to 2010 in Japan, Hepatology Research, doi: 10.1111/hepr.12497.

3. Katayama K, Sato T, Do H S, Yamada H, Tabuchi A, Komiya Y, Matsuo J, Nakashima A, Ohisa M, Akita T, Yorioka N, Miyakawa Y, Yoshizawa H, Tanaka J: Hepatitis B virus infection in hemodialysis patients in Japan: prevalence, incidence and occult HBV infection, *Hepatology Research*, doi:10.1111/hepr.12492.
4. Yamada H, Fujimoto M, Somana S, Lim O, Hok S, Goto N, Ohisa M, Akita T, Matsuo J, Do S H, Katayama K, Miyakawa Y, Tanaka J: Seroprevalence, genotypic distribution and potential risk factors of hepatitis B and C virus infections among adults in Siem Reap, Cambodia, *Hepatology Research*, doi: 10.1111/hepr.12367.
5. Do S H, Yamada H, Fujimoto M, Ohisa M, Matsuo J, Akita T, Katayama K, Van Nguyen N, Miyakawa Y, Tanaka J: High prevalence of hepatitis B and C virus infections among adults living in Binh Thuan province, Vietnam, *Hepatology Research*, doi: 10.1111/hepr.12350.
6. Tanimine N, Tanaka Y, Kobayashi T, Tashiro H, Miki D, Imamura M, Aikata H, Tanaka J, Chayama K, Ohdan H: Quantitative effect of natural killer cell licensing on hepatocellular carcinoma recurrence after curative hepatectomy, *Cancer Research*, 10.1158/2326-6066.CIR-14-0091.
7. Akita T, Ohisa M, Kimura Y, Fujimoto M, Miyakawa Y, Tanaka J: Validation and limitation of age-period-cohort model in simulating mortality due to hepatocellular carcinoma from 1940 to 2010 in Japan, *Hepatology Research*, 2014;44(7):713-719.
8. Sato T, Do H S, Asao T, Akita T, Katayama K, Tataka K, Miyakawa Y, Tanaka J: Estimating numbers of persons with persistent hepatitis B virus infection transmitted vertically and horizontally in the birth cohort during 1950–1985 in Japan, *Hepatology Research*, 2014;44(10):E181-188.
9. Okimoto S, Kiuchi Y, Akita T, Tanaka J: Using the early postoperative intraocular pressure to predict pressure control after a trabeculectomy, *Journal of Glaucoma*, 2014;23(6):410-414.
10. Kumada T, Toyoda H, Tada T, Kiriya S, Tanikawa M, Hisanaga Y, Kanamori A, Tanaka J, Kagebayashi C, Satomura S: High-sensitivity Lens culinaris agglutinin-reactive alpha-fetoprotein assay predicts early detection of hepatocellular carcinoma, *Journal of Gastroenterology*, 2014;49(3):555-563.
11. Tabata H, Akita T, Matsuura A, Kaishima T, Matsuoka T, Ohisa M, Awai K, Tanaka J: Cost-effectiveness of the introduction of low-dose CT screening in Japanese smokers aged 55 to 74 years old, *Hiroshima Journal of Medical Sciences*, 2014;63(1-3):13-22.
12. 松井裕輔、三村秀文、大須賀慶悟、秋田定泊、渡部茂、力久直昭、田中純子、森井英一、佐々木了: 血管腫・血管奇形の全国実態調査に向けての予備調査結果の報告、*IVR 会誌*、2014;29(1):62-67.
13. 山田裕子、片山恵子、海嶋照美、郷裕子、木村友希、松尾順子、田中純子: HBc 抗体測定系における PHA 法 (マイセル anti-rHBc) と CLIA 法 (アーキテクト・HBcII) の比較、*肝臓*、2014;55(7):409-412.

総説

1. 田中純子、片山恵子: C 型肝炎の疫学と対策、*日本臨牀*、2015;73(2):201-207.
2. 田中純子、片山恵子: 国内外における B 型肝炎の疫学、*血液内科*、2015;70(1):111-116.

3. 田中純子: 日本の HCV 感染の疫学-キャリア、臨牀消化器内科、2014;29(7):63-70.
4. 片山恵子、田中純子: 日本の HCV 感染の疫学-新規感染、臨牀消化器内科、2014;29(7):71-77.
5. 田中純子: C 型肝炎の疫学、医学と薬学、2014;71(6):955-961.
6. 田中純子: B 型肝炎の疫学、医学と薬学、2014;71(7):1153-1162.
7. 田中純子、片山恵子: わが国における HCV 感染の現状、Mebio, 2014;31(10):4-11.
8. 田中純子: IFN/RBV フリーDAA 薬の登場と疫学的視点からみた対策と課題、肝胆膵、2014;69:609-616.
9. 田中純子: 急性 C 型肝炎の頻度と届出義務、Medical Practice、2014;31(11):1840.
10. 田中純子: 日本における HCV 感染の疫学 update、肝胆膵、2014;69(6):867-872.
11. 田中純子: 肝がん制圧をめざした肝炎ウイルスキャリア対策-疫学的視点からみた検討、東京内科医会会誌、2014;30(2):138-143.

(2) 発表
該当なし

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究推進事業

H24-医薬一般-006

献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究 — 3年目 —

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター
臨床研究センター エイズ先端医療研究部
白阪 琢磨

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

平成27年
「はたちの献血」
キャンペーン
キャラクター
羽生結弦さん

羽生選手と一緒に
記念撮影
TAKE A PHOTO WITH YUZURU HANYU

献血会場内にあるポスターのQRコードを読み取って、
羽生選手と記念撮影しよう。
撮った写真はSNSでシェアできます。

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

供血者の実情調査と献血促進及び 阻害因子に関する研究

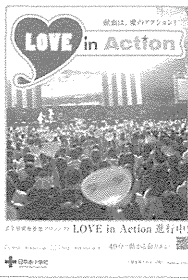


日本赤十字社
血液事業本部
西田一雄

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

3. LOVE in Actionプロジェクト(第1期～第6期)

- (1)目的
少子高齢化に伴い、若年層献血者が減少する中、若年層に献血の意義を伝え、献血行動を促すことを目的に展開する。
- (2)期間
第1期 平成21年10月1日～平成22年6月30日
第2期 平成22年7月1日～平成23年6月30日
第3期 平成23年7月1日～平成24年6月30日
第4期 平成24年7月1日～平成25年6月30日
第5期 平成25年7月1日～平成26年6月30日
第6期 平成26年7月1日～
- (3)後援
厚生労働省、全国FM放送協議会(JFN)
- (4)実施事項
Action 1 ロゴマーク大作戦
Action 2 ラジオ大作戦
Action 3 ご当地大作戦
Action 4 コラボ大作戦
Action 5 リンク大作戦
Action Final LOVE in Action Meeting(LIVE)

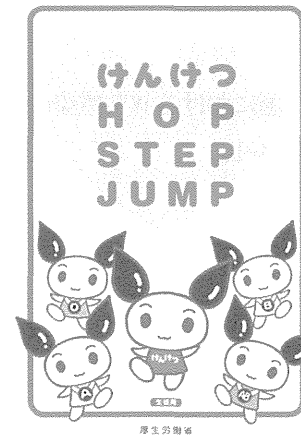


平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

<経緯>
我が国は、少子高齢化による人口動態、疾病構造の変化や臓器移植の推進など治療における輸血液の需要は一段と高まる傾向にある。将来の献血は、どうあるべきかの議論が今後必要であり、そのために献血者の必要数(量)の将来予測は重要である。

- <目的>
1 今後、必要な血液製剤の量、献血者数の将来予測を行う
2 これまでに実施された献血推進施策の有効性の検証を行う
初年度に推計モデルの構築を行い、2年目から推計モデルを用いた推計に取り組む。最終年度に得られた研究結果を解析する。

<実施計画>
初年度に推計モデル構築を行い、2年目からモデルを用いた推計に取り組む。最終年度に得られた研究結果を解析する。
限られた資源で有効な献血推進策の実施のために、これまでの献血推進施策の有効性の検証が重要である。先行研究で種々の対照群への推進施策へのアンケート調査や献血数の詳細なデータ分析によって施策の有効性を一部明らかにできたが、詳細な分析には至っていない。本研究では多岐にわたる献血推進施策から主なものを抽出し、アンケート調査あるいは献血数(量)の推移との関連を調査し、施策の効果の検証を行う。初年度は多岐にわたる施策を調査し、次年度は必要なアンケート調査、献血数(量)との関連を分析する。最終年度に結果を総合的に解析する。



平成22年度
厚生労働省では、例年、献血に関する適正な知識の普及に資するため、高校生用テキストを作成しております。
この度、平成22年版「けんけつ HOP STEP JUMP」の高校生用を掲載いたします。
なお、このテキストは、平成22年2月末より全国の高等学校、教育委員会等に対し直接送付しております。

2. 年代別献血者数の推移

	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
総献血者数	529万人	532万人	525万人	527万人	521万人	500万人
10代	295,811	292,853	286,534	295,683	308,178	281,377
20代	1,139,991	1,080,385	1,037,257	1,000,086	962,418	876,858
30代	1,414,747	1,376,596	1,317,138	1,243,040	1,150,688	1,036,016
40代	1,272,397	1,350,490	1,379,078	1,442,101	1,455,100	1,433,838
50代以上	1,164,155	1,218,262	1,232,175	1,290,193	1,329,435	1,371,035

※平成26年のデータは速報値

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

4. LOVE in Actionプロジェクトの実施内容

Action Final
LOVE in Action Meeting (LIVE)

参加者の感想(ラジオ番組用に当日会場にて収録)

「ゆちゃん(平原朋美さん)の歌に感動して…。最初はうたのお話だったんですけど、自分の弱い部分の話とかもかきつけて…。そんな中でやっぱり献血も大事なかなって…。プラスして伝わってきて、すごいアーティストの力って思いました。」

「私は取次で献血して欲しいみたいなのがきくんですけど、まず献血について全然知らなかったんですよ。血を探るくらいしか知らなくて…。今日、献血の話を聞いて自分の血が弱気な人たちに役立つことを知って、ちょっと自分もやってみようかなと思ったし、献血に協力している人たちはすごい愛を持ってなっていました。」

「私は友達に誘われて、「ま、タダだ」と思ってすごく軽い気持ちで来たんですけど、まさか本当に輸血で助かった方が出陣するなんてことも思わずに。実際に、その方の話を聞いて感動して泣いちゃって…。本当に注射が怖いので、今までは献血に行ってみようという気持ちは微塵もなかったんですけど、ぶっちゃけ、でも、ちょっと行ってみようかなって気持ちになったのと、今日泣かれた人にもそういうことを伝えていきたいと思いました。」

5. 第6期LOVE in Actionプロジェクトの取り組み

(1)5年間の実施に伴い、LOVE in Actionプロジェクトの認知度も高まっていること、また、10代の献血者数が増加していることから、基本的な施策(実施事項)については継続して実施する。

<プロジェクト認知率> 第1期=8.9%、第2期=17.3%、第3期=21.0%、第4期=22.1%

(2)ご当地大作戦として実施している地方イベントについては、より若年層に啓発できるような仕組みに変更する。

(3)若年層に献血会場に足を運んでもらうための施策の充実を図る。

6. 献血行動と協力意識に関する調査結果

(1)調査方法
調査会社に委託しインターネットにより実施(2013年7月)

(2)調査対象者
16歳~69歳の男女(全国)

(3)回収サンプル数
2,000名

(4)調査協力者の属性 (n=2,000 全体)

	全体	16-19歳	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳
男性	1,000	300	300	100	100	100	100
女性	1,000	300	300	100	100	100	100

ターゲット年代(若年層)

Q1 あなたは今までに献血をしたことがありますか。また、献血をしたことがある場合、初めて献血をしたのは何歳の時ですか。 [SA]

- ◆ 献血経験者は全体の38.1%であった。男女別では男性40.2%、女性35.9%と、男性のほうが経験率が高い。
- ◆ 若年層の献血経験率は22.9%であった。
- ◆ 献血回数に注目すると、初回献血年齢は、29歳以下が92.5%を占めた。

Q2 初めて献血をした時の動機は何でしたか。あてはまるものをすべてお選びください。 [MA]

- ◆ 初回献血の動機は、全体では「近く(献血会場)があったから」が30.9%で最も多く、以下「献血に興味があったから」(27.5%)、「人助けの気持ちから」(25.2%)が続いた。
- ◆ 「献血に興味があったから」は、男性は21.4%で全体(27.5%)に比べ、6.1pt低かったが、女性は34.3%で全体(27.5%)に比べ、6.8pt高い結果となった。
- ◆ 「時間がなかったから」と回答した若年層は、27.4%で全体(20.0%)に比べ、7.4pt高かった。

Q3 最近の献血の頻度はどれくらいですか。 [SA]

- ◆ 最近の献血頻度は、全体で「1年に1回以上」(13.5%)が最も多く、次いで「1年に1回」、「数年に1回」が続いた。
- ◆ 若年層では、男性16~19歳で「1年に1回以上」(献血している人は30.0%と全体(10.8%)に比べ、19.2pt高い)に対し、男性20~29歳で「1年に1回以上」(献血している人は、16.2%と全体(10.8%)に比べ、5.4pt低い)と分かった。また、女性16~19歳で「1年に1回以上」(献血している人は、33.3%と全体(10.8%)に比べ、22.5ptの差がある)に対し、女性20~29歳で「1年に1回以上」(献血している人は、14.6%と3.8ptの差にとどまった)。
- ◆ 若年層は「1年に1回」(20.4%)が最も多く、30代以上では「1年に2回以上」(10.4%)が最も多い。

Q4 献血について、よくないと思う点や、不安に思う点があれば、いくつかお選びください。 [MA] ※献血経験者対象

- ◆ 献血についてよくない不安に思う点として、「献血会場が近くにない」が最も多く、全体の24.0%を占めた。以下「献血に要する時間が長い」(19.2%)、「献血で具合が悪くなるのでは」と不安(17.1%)が続いた。
- ◆ 「献血に要する時間が長い」と答えた人が最も多かったのは、男性20~29歳(29.3%)で、全体(19.2%)に比べ10.1pt高かった。
- ◆ 若年層は、「痛い」(20.4%)に不安に思っており、全体(13.3%)に比べ7.1pt高かった。

Q5 献血をしたい気持ちがありますが、[SA] ※献血未経験者対象

- ◆ 献血未経験者で、今後、献血意向がある人(「献血をしたい気持ちがあるが、したことがない(できない)」)は全体で69.2%であった。
- ◆ 性別で見ると、女性で献血意向がある人は76.8%と高く、一方で男性は61.0%にとどまった。
- ◆ ターゲット年代別では、若年層で献血意向がある人は68.1%であった。
- ◆ プロジェクト認知層で、献血意向を示した人は79.4%と全体に比べ高い。

Q6 献血をしていない(できない、しない、したことがない)理由を、いくつかお選びください。 [MA]

- ◆ 献血をしていない理由は、全体では「献血に行く時間がないから」(30.0%)が最も多かった。以下「近く(献血会場)がないから」(23.8%)、「献血についてよく知らないから」(22.8%)が続いた。
- ◆ 献血経験者の理由の1位は、「近く(献血会場)がないから」(33.6%)で、2位は「献血に行く時間がないから」(33.1%)となった。
- ◆ 若年層では「献血に行く時間がないから」(35.5%)が最も多く、次いで「献血についてよく知らないから」(32.6%)が高かった。

Q7 献血したいと思わない理由を、いくつかお選びください。 [MA]

- ◆ 献血したいと思わない理由は、全体では「若者だから」が30.6%で最も多く、次いで「献血について考えたことがないから」(20.0%)、「献血についてよく知らないから」(19.2%)、「無事で済んでから」(14.0%)が続いた。
- ◆ プロジェクト認知層のうち「若者だから」と答えた人は43.0%で全体(30.6%)に比べ、12.4pt高く、プロジェクト非認知層(28.7%)よりも高みに比べて、積極に反応している結果となった。
- ◆ また、若年層で「若者だから」と答えた人は39.2%と、全体に比べ8.6pt高かった。

Q8 献血について、よいと思う点を、いくつかお選びください。 [MA]

- ◆ 献血のよい点としては、「人助けになる」が全体の70.7%で最も多かった。以下「血液検査の数値などがわかり、健康管理に役立つ」(45.6%)、「献血会場のサービス」(30.6%)が続いた。
- ◆ 若年層で「血液検査の数値などがわかり、健康管理に役立つ」(39.5%)と答えた人は、全体(45.0%)に比べ、5.5pt低かった。
- ◆ プロジェクト認知層は、「血液検査の数値などがわかり、健康管理に役立つ」「献血会場のサービス」「献血回数によって記念品がもらえる」「献血する場所で、雑誌やDVDが見られる」といった、献血会場を知っている人ならではの項目に対して反応が高かった。

若者における献血意識と献血行動の促進および阻害因子に関する研究

(株)エフエム大阪 林 清孝・田辺善仁

若者メディアであるFMラジオを活用して、常時、献血の状況を訴求し、若者イベントを実施することで、献血広報の効果的な在り方を実証していきます。リスナーからのアンケートを集計し、若年層の生の声をより多く反映し献血推進のデータ収集を行います。

御堂筋献血ルーム CROSS CAFE

「Brand-new Blood @CROSS CAFE」 配信中！！

毎週土曜日、「御堂筋献血ルーム CROSS CAFE内スタジオ」よりイベント番組をお届け中！

公開イベント番組 Brand-new Blood @ CROSS CAFE

出演 FM大阪DJ 若田泉、他

USTREAMによる配信も実施！！「Brand-new Blood @ CROSS CAFE」

ニコニコ生放送でも配信開始！！「御堂筋A de LIVE」

①よしもとラジオ高校〜ラジオー
献血推進コーナー、毎週火曜日：学天即 21:37~5分
コーナー(事前収録)

②なんMEGA！Z(毎週金曜日 15:00~19:00生放送)
要ですサークル(18:35~18:40生放送)
内容：毎週1回の「献血予報」をONAIR

献血推進キャンペーンのポイント

輸血用血液製剤の84.8%は50歳以上の患者さんに使用されています。この割合は、高齢化と連動し、ますます増える傾向にあります。今後輸血を必要とする患者さんが増え、さらに多くの血液が必要となります。少子高齢化が進む中、特に10代、20代の献血者を増やす努力が恒常的に必要であります。

大阪府赤十字血液センターとの打合せの中で、安定的に献血者数を増やすため、以下の3点が重要だと考えます。

- ①献血初体験者を恒常的に増やすことが重要！
- ②初体験者を二回目に誘導することが重要！
- ③男子は12週間後、年間3回、女子は16週間後、年間2回を目標とし、その間は成分献血でつなぐ工夫が必要！

実施月	USTREAM(リアルタイム)	USTREAM(アーカイブ)	ニコ生(リアル+アーカイブ7日間)	合計
4月	247	162	494	903
5月	240	215	739	1194
6月	561	309	797	1667
7月	336	378	777	1491
8月	323	1052	737	2112
9月	175	988	595	1758
10月	256	515	623	1394
11月	182	881	609	1672
12月	150	695	532	1377
合計	2470	5195	5903	13568

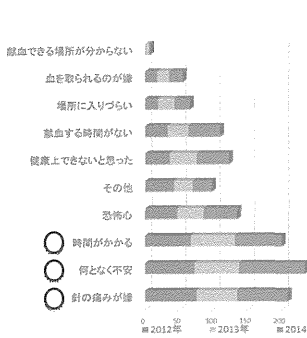
●新たなツールとして「LINE」を使用したPR展開を模索する。

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

長崎大学医学部保健学科における 献血・輸血についての意識調査

長崎大学病院
長池 恵美
濱本 洋子
宮崎 智子
江藤 栄子
秋田 定伯

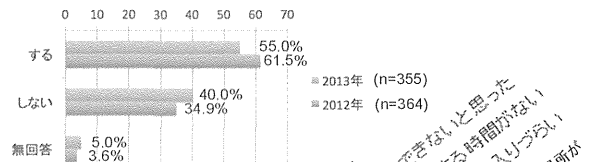
献血を敬遠する理由



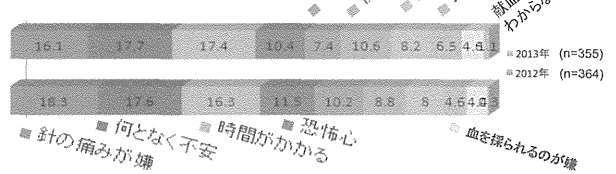
敬遠の理由 (複数回答)	2012年	2013年	2014年
針の痛みが嫌	75	59	74
何となく不安	72	65	96
時間がかかる	67	64	68
恐怖心	47	38	49
その他	42	27	28
健康上できないと思った	36	39	47
献血する時間がない	33	30	46
場所に入りにくい	19	24	22
血を取られるのが嫌	18	17	20
献血できる場所が分からない	1	4	2
合計(人数)	410	367	452

24年度 vs 25年度調査結果

献血を敬遠するか？



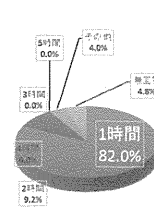
献血の理由は？



2014年度の比較「献血の許容時間」

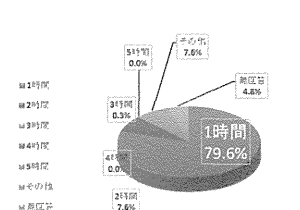
献血経験あり

献血時間の許容範囲(n=74)



献血経験なし

献血時間の許容範囲(n=314)



平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

献血推進に向けた 職員の研修方法に関する研究について

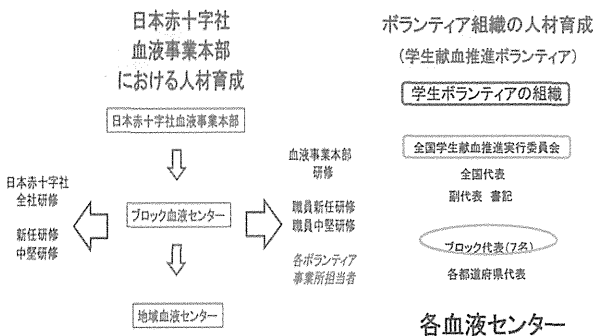


日本赤十字社
血液事業本部
献血推進課
井上 慎吾

研究要旨

より安全な輸血用血液製剤を安定的に供給するためには、日常からより有効となる献血推進を展開する必要がある。
近年は、特に若年層献血の減少、献血離れの現象があることが指摘されており、同研究事業では「供血者の実情調査と献血促進及び阻害因子に関する研究II」において、その原因の解明を行い、献血推進に向けた戦略的な広報の開発研究に取り組んでいる。一方で、**広報展開も含め、より有効な献血推進を継続的に実施し、目標を達成するためには、職員や学生ボランティア及び献血推進団体等のスキル向上が必要不可欠であり、理想的な研修モデルを構築することが重要であることから本年度において学生ボランティアの研修を重点項目とした。**

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究



平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

1 学生献血推進ボランティアの組織体系について

若年層に対する献血推進及び献血思想の普及を目的に活動を行っている、各都道府県の大学、短期大学及び専門学校におけるボランティアサークル等で構成されており、その代表組織である全国学生献血推進実行委員会において、学生相互の意見交換や全国統一キャンペーンの企画・立案等を行っています。



	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
団体数	269団体	289団体	299団体	256団体	268団体
所属者数	4,501人	4,973人	5,171人	5,720人	6,512名

- ※団体数・所属人数は平成24年度の数字です。
- 2 全国学生献血推進実行委員会
 - ア. ブロック間の意見交換及び評議と全国の献血推進計画
 - イ. 全国学生統一献血キャンペーンの企画立案 (全国学生クリスマス献血キャンペーン)
 - ウ. 分科会
 - エ. 他の献血推進団体との連携協力活動
 - オ. 目的達成に必要な活動の実施
 - カ. 各都道府県学生献血推進組織の名称・所属人数の把握
 - 3 全国学生献血推進代表者会議
 - 研修会の実施(講演会、活動報告)
 - グループ討議等



- ア) 第1回全国学生献血推進実行委員会 (日本赤十字社 本社)
 - 平成26年5月24日(土)~25日(日)
 - 平成25年度の活動報告と平成26年度の活動計画
 - 全国学生クリスマス献血キャンペーンの資料検討
 - グループ討議のテーマ協議 → 意識改革
- イ) 第2回全国学生献血推進実行委員会 (大阪府)
 - 平成26年8月20日(水)~22日(金)
 - 検討事項のまとめ
 - 第3回全国学生献血推進実行委員会への課題
 - グループ討議 → 学生ボランティアとしての役割を導き出す
- ウ) 第3回全国学生献血推進実行委員会 (日本赤十字社 本社)
 - 平成27年3月上旬(予定)
 - 全国学生クリスマス献血キャンペーンの実施報告
 - 各ブロックにおけるイベントの報告
 - 平成27年度実行委員長への検討事項の引継ぎ

グループ討議によって導き出された効果

学生献血推進ボランティアを対象とした、研修については、将来の献血基盤となる若年層への献血の意識付けとして重要なものと考えられる。特に有効な情報提供(献血の現状、献した血液の使われ方等)をすることで個々の意識向上が見られたことや、グループ討議の内容(同世代への広報活動: SNSの積極的な活用、大学内での広報活動の強化、魅力的な献血推進イベントの実施)や導き出した結果からは組織として積極的に取り組む姿勢が認められた。また今回の研修内容は学生自ら「意識改革」のテーマを掲げ分科会に臨んだ事が評価されると考える。

期待される効果

全国の学生献血ボランティアが、研修の在るべき姿を自ら模索し、テーマを掲げ実行出来る環境が整ってきた。また、この研修を終えた人材が各地域に戻り、若年層への献血思想の普及啓発のイベント(Love in Action等)へ直接参加することで、**同世代への訴求をより具体化した内容に変化させ、新たな若年層への行動を起こす流れが出来つつある。**



6

献血率に与える要因分析と効果的な施策のあり方に関する研究

一 区市町村および日本赤十字社地域血液センターの献血推進活動に関する論点整理 一

研究分担者 河原 和夫(東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 環境社会医歯学系専攻 医療政策学講座 政策科学分野 教授)
 研究協力者 菅河 真紀子(東京医科歯科大学大学院 政策科学分野 特任助教)

研究目的

わが国の急速な高齢化の進行は、医療現場での血液製剤の需要を高める要因であるとも言われている。一方、少子化は献血者の主体となるべき若者や働き盛りの人口層の減少を招いている。こうした社会背景から、血液製剤の需給バランスの不均衡が生じることが危惧されている。必要な献血者を確保するために、献血推進活動などを通じて献血未経験者を新たな献血者に移行させることや既献血者が複数回献血するなどの献血基盤の強化が求められている。

本研究は、全国市町村や地域血液センターの「献血推進担当者」の献血推進に関する意識調査を行い、地域での献血推進に資する方策の選択がなされているか否か、妥当な献血推進施策が実施されているかを検証するものである。加えて、今後の献血推進活動の方向性を提示するために実施したものである。

方法

全国の市町村や日本赤十字社の地域血液センターの「献血推進担当者」に対して献血事業の推進に関する意識調査を行い、地域での献血推進に資するための論点を整理するために、以下のアンケート調査を実施した。

(1) 区市町村に対するアンケート調査

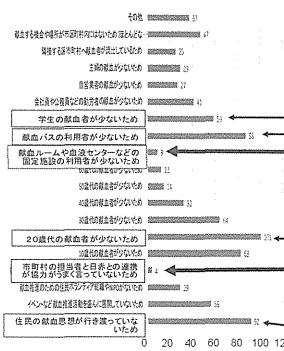
全国1,741か所の区市町村の献血推進業務担当部署の担当者に対して行った。平成27年1月23日時点で650か所の区市町村から回答が寄せられた(回収率は、37.3%)。

(2) 日赤地域血液センターに対するアンケート調査

47か所の日赤地域血液センターの献血推進業務担当部署の担当者に対して行った。

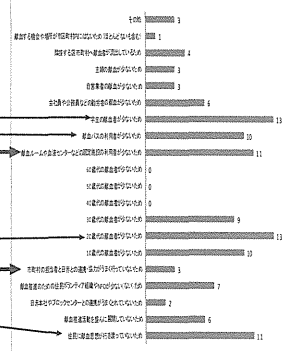
市区町村

図3 献血状況が悪い理由



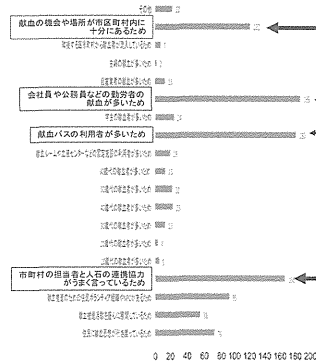
日赤地域血液センター

図36 悪い献血状況の原因と考えられるもの



市区町村

図4 献血状況がうまくいっている理由



日赤地域血液センター

図37 良い献血状況をもたらしたと考えられる要因

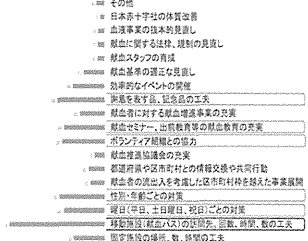


市区町村

図1 管内の献血状況を把握する情報源



図6 今後の献血推進に必要な事(複数回答可)



地域血液センター

図9 献血状況の把握方法

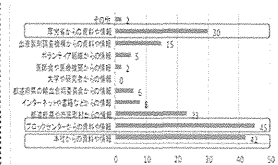


表40 移動施設(献血バス)の訪問先、回数、時間、数の工夫

工夫を考える	回数	パーセント	有効パーセント
回数1	11	29.4	85.3
回数2	32	25.5	88.7
回数3	3	6.4	9.7
回数4	2	4.3	6.5
回数5	3	6.4	9.7
合計	31	66.0	100.0
工夫を考えない(未回答)	16	34.0	
未回答	47	100.0	

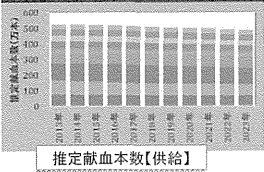
まとめ

- 市町村合併の影響は、自治会や婦人会などの地域組織との連携・意思の疎通に見られる。つまり、合併後はこれらの団体との意思の疎通が少なくなったとの回答が多かった(p<0.05)。
- 市より町村の方が、「日赤血液センター」との連携や意思の疎通は希薄である(p<0.05)。
- 献血がうまくいっていないところは、市区町村ともに「市区町村と日赤との連携・協力体制に問題がある。」との回答が少なかった。一方、うまくいっているところは、多くの市区町村と地域センターが「連携・協力体制がよいから」と回答していた。うまく行っていない理由を双方の連携体制の希薄さには求めていなかった。
- 市区町村の献血に関する情報を把握するために用いる資料は、「日赤地域血液センター」と「都道府県」からの情報が最も多かった。日赤地域血液センターのそれは、「日赤本社」、「ブロック血液センター」、そして「都道府県」からのものが多かった。
- 血推進のための情報源としては、「輸血療法委員会」の役割は希薄であった。もちろん当委員会は適正使用の推進などの臨床的知識の普及を旨としているが、今後、献血から血液使用に至る包括的な知識を関係者に提供していく役割を担って良いのではないかと？
- 今後の献血推進にとり必要な事柄のトップは、両者ともに「移動施設(献血バス)の訪問先、回数、時間、数の工夫」であった。

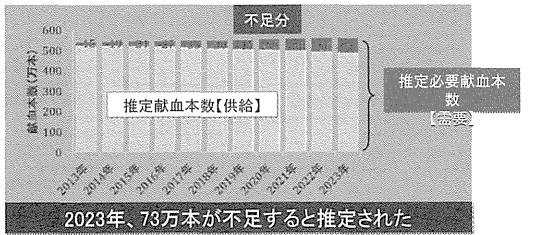
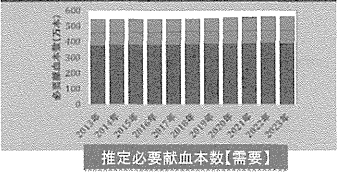
厚生労働科学研究費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

2. 献血本数の将来予測と実測値の比較
- 2015年1月(今月です)に、日赤より2013年度のデータ提供を受けたので、予測値との比較をしました(速報)。
 - 2008-2009年度の「献血増加」行動に基づく将来予測値よりも、実際は減少
 - 2006-2007年度の「献血減少」行動に基づく将来予測値よりも、実際は増加していました。
 - これは、平成18年度以降献血行動が活動的になっているが、平成23年以降の勢いが平成20年頃と比較して下がっていることが考えられました。
3. 2008-2010年度には、40歳代、50歳代の献血本数が増えています。これは、40歳の人口が増えているためと考えられ、これまで、人口当たりの献血本数の検討など行ってきました。
- 今回、出生年(同級生)コホートという観点から、献血本数の推移を、トライアルで検討しました。
 - 意味のある結果が得られたとは言えませんが、若い世代(1980年代以降生まれ)は、19歳をピークに献血をしなくなります。
 - 1960年代生まれは、2012年以後、献血が減少
 - 1950年代生まれは、2009-2010年以後、献血が減少 となりました。
 - この検討は、不十分ですので、あらためて報告します。

I. (供給)マルコフモデルによる献血本数の将来推計の試み



II. (需要)将来推計人口に基づく輸血用血液製剤の供給に必要な献血本数の推計



厚生労働科学研究費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究班 第2回 班会議

今年度のテーマ: 献血本数の推移と献血推進運動との関連性

今日は、出席できずもうしわけありません。
今回、下記の3つの検討を行いました。
結果の概略を、まず、お伝えします。
その後、秋田智之助教から報告させていただきます。
田中 純子

- Love in Actionイベントの実施月と月別献血本数の推移との関連性を検討しました。
- 都道府県別にまず並べて検討しましたが、明らかな関連性はみられませんでした。
- しかし、Love in Actionの行われた月と献血本数との関連性を、年度と月を調整して、多変量解析をしたところ、統計学的には有意に「Love in Actionの行われた月」に「献血本数」が0.8%増加することが明らかとなりました。つまり、Love in Actionが効果があった。と言えます。

平成26年度厚生労働科学研究費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

献血の需要と供給の将来推計の試み2014

広島大学 大学院医歯薬保健学研究院
疫学・疾病制御学
田中 純子

目的

平成18年から26年の全献血の資料を用いて以下の項目について検討する

- 平成22~24年度における都道府県別にみたLove in Actionイベントの実施月と月別献血本数の推移との関連性
- 平成18-19年(減少傾向)および平成20-21年(増加傾向)の献血行動推移確率による献血本数の予測値(昨年度報告)と実測値の比較
- 平成20~25年における出生年別にみた献血本数の推移の検討

対象

平成18年4月1日から平成26年3月31日までの全献血を対象とした。

1) 平成18(2006)年度 4,983,009本	2. 献血行動推移確率による献血本数の予測と実測の比較の対象(全年度)
2) 平成19(2007)年度 4,965,230本	
3) 平成20(2008)年度 5,137,612本	1. イベント実施と献血本数との関連性検討の対象
4) 平成21(2009)年度 5,303,431本	
5) 平成22(2010)年度 5,329,676本	
6) 平成23(2011)年度 5,250,866本	
7) 平成24(2012)年度 5,249,728本	
8) 平成25(2013)年度 5,156,325本	

2. 献血行動推移確率による献血本数の予測と実測の比較の対象(全年度)
3. 出生年別にみた献血本数推移検討の対象

平成26年度厚生労働科学研究費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

1. 平成22~24年度における都道府県別にみたLove in Actionイベントの実施月と月別献血本数の推移との関連性

方法 1

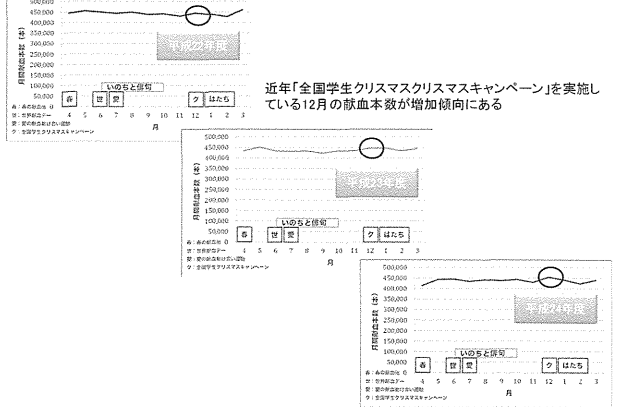
- 平成22~24年度における都道府県別にみた月別献血本数を算出し、月別献血本数と全国的な献血推進キャンペーンやLove in Actionプロジェクトによるイベント実施月との関連性を比較した。
- 都道府県別にみた人口1000人当たりの献血本数(献血率)と以下の要因との関連性を検討するために統計解析を行った:
 - ◆ 年度(平成22、23、24)
 - ◆ 月(4月~翌3月)
 - ◆ 47都道府県
 - ◆ Love in Action プロジェクトによるイベントの実施月

解析方法: 献血率を目的変数としたポアソン回帰分析
 $y_{ij} \sim \text{Poisson}(\mu_{ij})$,
 $\log(\mu_{ij}) = \log(N_{ij}) + \text{切片} + \text{Prefecture}_i + \text{Month}_j + \beta \times \text{イベントの有無}$
i: 都道府県を表す添え字(1=北海道、2=青森、...、47=沖縄)
j: 月を表す添え字(4,5,6,...,12,1,2,3)
 y_{ij} : 都道府県*i*、月*j*における献血本数の実測値
 μ_{ij} : 都道府県*i*、月*j*における献血本数の期待値
 N_{ij} : 都道府県*i*の人口
 Prefecture_{*i*}: 都道府県*i*の効果の大きさ
 Month_{*j*}: 月*j*の効果の大きさ
 β : Love in Actionプロジェクトによるイベント実施による効果の大きさ

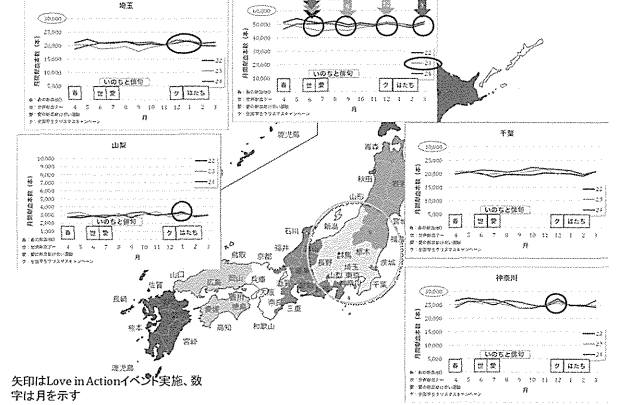
平成22～24年度 Love in Action プロジェクトのスケジュール

活動名	主体	日時	開催都市	開催場所	参加者数
LOVE in Action Meeting	日赤	2010年5月14日	大阪府大阪市	グランキューブ大阪	2,038
LOVE in Action Meeting	日赤	2010年6月10日	東京都渋谷区	渋谷C.C.Lemonホール	1,942
ご当地大作戦	日赤	2010年6月11日	広島県広島市	広島グリーンアリーナ	500
ご当地大作戦	日赤	2010年11月14日	石川県金沢市	ぎんぎんアリーナ	400
ご当地大作戦	日赤	2010年12月11日	岩手県盛岡市	イオンモール盛岡	450
ご当地大作戦	日赤	2010年12月26日	北海道札幌市	サッポロファクトリー	600
ご当地大作戦	日赤	2011年3月27日	大阪府大阪市	アザリカ村BIGSTEP	300
ご当地大作戦	日赤	2011年3月27日	富山県富山市	イオンモール富山	400
LOVE in Action Meeting	日赤	2011年6月14～15日	東京都千代田区	日本武道館	15,985
ご当地大作戦	日赤/イナズマロックフェス事務局	2011年9月17日	滋賀県草津市	イナズマロックフェス2011鳥丸	518
ご当地大作戦	日赤/5iVE STAR東京	2011年9月25日	東京都渋谷区	渋谷O-EAST	520
ご当地大作戦	日赤	2011年12月23日	北海道札幌市	サッポロファクトリー	250
ご当地大作戦	日赤/HARAJUKU KAWAII!!!	2011年12月26日	大阪府大阪市	2BPP OSAKA	1,500
ご当地大作戦	日赤/HARAJUKU KAWAII!!!	2011年12月28日	東京都江東区	STUDIO COAST	1,500
ご当地大作戦	日赤	2012年1月14日	秋田県秋田市	イオンモール秋田	1,500
ご当地大作戦	日赤	2012年3月26日	高知県高知市	イオンモール高知	400
ご当地大作戦	日赤	2012年4月15日	富山県高岡市	イオンモール高岡	400
ご当地大作戦	日赤	2012年5月20日	長崎県長崎市	長崎駅前かもめ広場	1,000
LOVE in Action Meeting	日赤	2012年6月14～15日	東京都千代田区	日本武道館	15,390
ご当地大作戦	日赤	2012年9月23日	福島県郡山市	ショッピングモールフェスタ	550
ご当地大作戦	日赤	2012年10月28日	徳島県板野郡	ゆめタウン徳島	250
ご当地大作戦	日赤	2012年11月11日	北海道札幌市	イオンモール札幌発寒	550
ご当地大作戦	日赤/HARAJUKU KAWAII!!!	2012年12月1～2日	広島県広島市	広島NTTクレドホール	2,000
ご当地大作戦	日赤/神戸コレクション	2013年3月9日	兵庫県神戸市	ワールド記念ホール	8,000
ご当地大作戦	日赤/TOKYO RUNWAY	2013年3月20日	東京都渋谷区	代々木第一体育館	15,936

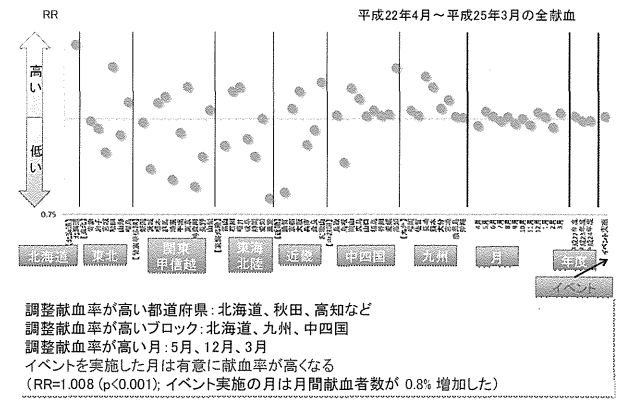
平成22～24年度月別献血本数の推移【全国】



都道府県別にみた平成22～24年度月別献血本数の推移



都道府県・月別にみた献血率 (人口1000人当たり献血本数)の要因分析



まとめ 1

- ◆ 平成22～24年度における、都道府県別にみた月別献血本数の推移と全国の献血推進運動やLove in Actionプロジェクトによるイベント実施との関連性を検討した結果、推移のグラフ上では明らかな関連性はみられなかった。
- ◆ しかし、人口1000人当たりの献血本数を目的変数、Love in Actionプロジェクト実施の有無、都道府県、年度、月を説明変数とした多変量解析では、Love in Actionプロジェクトのイベント実施月は有意に献血本数が増加していたことが明らかになった。
- ◆ 人口1000人当たりの献血本数が多い都道府県は北海道、高知、秋田など、ブロックでは北海道、九州、中四国であった。また、多い月は、5月、12月、3月であった。

全体のまとめ

- 平成22～24年度の都道府県別にみた人口1000人当たりの献血本数を目的変数とした解析により、Love in Actionプロジェクトのイベント実施月は有意に献血本数が増加していたことが明らかになった。
- 平成18(2006)から19(2007)年、および平成20(2008)年から21(2009)年の献血行動推移確率から予測した平成25(2013)年までの献血本数の推定値と実測値を比較すると、平成23年以降の実測値は平成18・19年度の推定値よりも高く、平成20・21年度の推定値よりも低くなった。これは、平成18年度以降献血行動が活動的になっているが、平成23年以降の勢いが平成20年頃と比較して下がっていることが考えられた。
- 平成25年年齢別にみた献血本数の推移から以下のことが明らかになった。
 - 若年層では、いずれの年の出生集団も19歳を境に増加から減少に転じていた。
 - 中高年層では、平成20年以降増加傾向を示していたが、平成22～24年頃を境に減少に転じていた。
- 以上のことから、献血推進施策立案において考慮すべき点として以下のことが考えられた。
 - 平成19年以降の全体の献血本数増加に寄与していたと考えられる中高年層の献血本数は22・24年頃から減少に転じていた。しかしながら、今後50歳代・60歳代になる中高年層への献血推進は、健康面や献血基準の面から困難であると考えられた。
 - 若年層では献血本数が低下し始める20歳代前半の献血推進が将来の献血本数確保の面から有効であると考えられた。
 - Love in Actionプロジェクトのイベント実施により、当該月の献血本数が増加することが明らかになった。イベント中またはイベント後に献血をした人に継続して献血してもらうための対策が有効であると考えられた。

NHK総合 毎週土曜 午前8:15～9:28
2015年02月07日放送

土曜の朝は しっかり! じっくり!
週刊 FU.KA.YO.MI.
ニュース 深読み

血が足りない!? どうなる? どうする? 献血

平成26年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等イノベーション推進事業 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

まとめ

- 献血推進プロジェクトLove in Actionは実施月で0.8%の増加をもたらした。
- 需要と供給の将来推計からは2023年、73万本が不足すると推定された。
- 若年層では献血本数が増え始める20歳代前半の献血推進が将来の献血本数確保の面から有効と推察された。
- 献血の所要時間は入り口から出口まで1時間までが望まれ、献血時の混み具合等の情報も必要かと推察された。
- 献血確保が良好なところは、多くの市区町村と地域センターが「連携・協力体制がよい」との回答であった。
- 今後の献血推進にとり必要な事柄のトップは、両者ともに「移動施設(献血バス)の訪問先、回数、時間、数の工夫」であった。
- 若年層への献血推進の働きかけは引き続き必要である。